

〈国際交流ワークショップ発表論文〉

## 中国の観音信仰における『首楞嚴経』の影響について

中国海南師範大学南海区域文化研究中心研究員 林 敏

### 一、はじめに

観世音（以下観音と略称）信仰は、中国及び東アジアの根本の信仰であり、インドから中国に伝わってきたのは仏教と共に伝来したと思われる。例えば、後漢の支曜訳『仏說成具光明定意経』中には「観音」（『大正蔵』卷一五、頁四五一、下段第一〜二行）とあり、西晋の竺法護訳『普曜経』卷一の説法門品第二でも「観音法門」（『大正蔵』卷三、頁四八七、上段第二二行）とされている。今でも、筆者の故郷、海南島の三亜市にある南山の海岸に海の中、一〇八メートルの南海観音が二〇〇四年に建てられた。観光客は一日々十五万人を超える時期もあり、人気の観光地であると共に、観音信仰の礼拝場にもなっている。経済と社会の急速な成長に齎された人々心のストレスを解消できる場所となりつつも、人々に新たな勇氣と穏やかで平和な気持ちを与える観音信仰の道場にもなっている。従って、観音信仰の研究は中国及びアジア世界にとって生きた意義を持つていると思われる。中国における観音信仰の歴史の流れを遡ると、唐代までは、普門観音信仰と千手千眼大悲観音信仰の二つに分けられると先学達は指摘している。今は、この先学達の研究成果に触れながら、二つの流れをまとめようとする経典―『首楞嚴経』第六卷にある観音菩薩の部分を検討したい。

## 一、中国の普門観音信仰

観音菩薩といえ、『法華経』普門品という経典が思い出されたが、法華経の初訳と前後して中国で訳された経典のうち、観音菩薩について言及のあるものとしては、浄土系の『阿弥陀経』・『無量寿経』・『無量清浄平等覚経』の三経が、三世紀の後半すでに訳されたものとして存在する。<sup>(1)</sup>このうち、『無量寿経』の中に、阿弥陀仏の両脇侍として観音菩薩・勢至菩薩の名をあげる西方三聖となる存在が印象的なものである。本格的な観音信仰には、『法華経』系の経典が翻訳された後のこととされている。『法華経』系経典として現存する『正法華経』・『妙法蓮華経』・『添品法華経』の中で、竺法護訳『正法華経』の完成は太始元年（二七六年）とされ、観音信仰は遅くともこの時期にまで遡られる。<sup>(2)</sup>さらに、『観世音経』は『法華経』系経典から独立して流行し、新たな『観世音経』を造り始める時期を迎えた。また、観音信仰には、観音の姿が女性化された妙善公主が出現したことが宋代に纏められた書物の中に書かれている。<sup>(3)</sup>「どの家にも弥陀があり、家ごとに観音がある」（「家家有弥陀、戸戸有観音」）<sup>(4)</sup>とわざもある。今でも、毎年の旧暦二月十九日・六月十九日・九月十九日は観音の誕生日・出家・成道として庙会などの行事が何日かに亘って盛んに行なわれている。『観音心験伝』・『観音心験記』・『宣験記』・『冥詳記』など観音信仰の物語が次々と登場した。このように、観音信仰は民衆の中に広まり盛んになってきたが、同時に、観音信仰の理論的な研究も進み、深く人々の自性真心の底に本流として到達した。

上の述べたように、法華経系から独立した『観世音経』は、『祐録』（新集統撰失訳雜経録）には以下の通りである。

観世音求十方仏各為授記経一卷（抄）

観世音所説行法経一卷（是呪経）

光世音経一卷（出正法華経或云光世音普門品）

観世音経一卷（出新法華）

請観世音経一卷（一名請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経）（『大正蔵』卷五五、頁三二、中段第一六～二三行）

さらに、中国撰述の經典として、智昇『開元録』の『疑惑再詳録』と『偽妄乱真録』の中にあげている観音経論は、以下のとおりである。

観世音三昧経一卷

弥勒下生遣観世音大勢至勸化衆生捨惡作善寿樂経一卷（亦直云寿樂経十紙）

高王観世音経一卷（亦云小観世音経半紙餘）

観世音十大願経一卷（仁寿録云一名大悲観世音経具題云大悲観世音弘猛慧海十大願品第七百）

観世音三昧経一卷

弥勒下生観世音施珠寶経一卷

観世音詠託生経一卷

新観世音経一卷

日蔵観世音経一卷（一紙半）

観音無畏論一卷（隋日有人偽造积高王観世音経）（『大正蔵』卷五五、頁六七一中段第二〇行～頁六八〇上段第一七行）

これらのように膨大な中国撰述經典は、観音信仰が中国本土に受容され変容した役割を果たしたのであろう。先学が指摘したように、六朝期までには、観音の功德、利益、性格、能力などが世に認められ、礼拝、供養といった実際の規定が定まり、観音信仰の本質は確立した。それと共に、観音に対する教理的な研究、つまり、観音信仰の哲学的な研究が、隋代に至ると、空前絶後の頂点に到達し、吉蔵・智顛等の仏教研究者達によって盛んに行われた。例えば、智者大師智顛は『法華文句』・『法華義疏』の観音普門品の注釈中だけでなく、『観音玄義』・『観音義

疏』・『請観音経疏』の中でも次のように論じている。即ち、観音というのは、「観」とは観智、即ち宗教的叡智ともいふべき、濁りなく惑いなき心の働き、朗らかに清らかな智慧と感情とを渾融した認識、主観ともいふべきもの、「世」とは客観的世界の一切のもの、「音」とは機のこと、機は機根、狭義には観音信仰を求める宗教心のハタラクであり、広くは一般の要求に向つて働きつつある生類のことである。さらに、「観世音」とは、曇りなき宗教的理性の鏡に映る世界及び人類とも言え、あるがままの世界及び人類が、宗教的観照の鏡において、あるべき理想の姿にまで高められ浄められることと解することが出来るという<sup>6)</sup>。このような観智に洗練された真理の観音という解釈は特徴的である。六朝時代の観音信仰の研究は理論的な発展の一つの頂点であると共に、観音信仰の広まりを背景としてさらに深い側面に至つたのであろう。

### 三、中国の千手大悲観音信仰

普門観音の流れが観音信仰の底流をなつた一方<sup>7)</sup>で、隋唐代に入ると、もう一つの流れがインドの密教的な観音信仰の強い影響を受けてやってきた。このことは、大藏経の密教部の諸菩薩義軌の中に、観音菩薩に関する経疏軌は九十九種類存在するが、二番目に多い文殊菩薩（二十八種）・三番目に多い金剛薩埵菩薩（七種）と比べると、圧倒的に多いことがわかる。この事実こそ、密教的な観音の信仰・研究がきわめて盛んであつたことを強く反映しているといえる。このインド的な特徴を持つ複雑怪奇な変化観音の登場する経典が、唐代において、最も流行していた。佐和隆研氏の研究<sup>8)</sup>によれば、東晋の『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経』にみえる観音菩薩や、他に、十一面観世音菩薩、不空絹索観音菩薩、陀羅尼集経などの変化観音菩薩、准提観音菩薩、如意輪観音菩薩、馬頭関音菩薩、千手千眼大悲観音菩薩などが次々と伝来して展開し次第に、中国の本土の複雑な思想信仰文化に寄りそつて大悲観音菩薩にまとめられたとわれている。小林市太郎氏<sup>9)</sup>によれば、唐代の新訳時代になると、中国人に受け入れられやすいように、

観音の凶像と信仰形態が大きく変化し、非常に複雑怪奇な、陀羅尼の効能がある十一面、不空絹索、准提、如意輪、千首、千手、千臂、千眼などの変化観音となった。最終的にそれらの変化諸観音の信仰は、大悲のそれに吸収され、そして、大悲菩薩、密教諸観音のうち最も豊麗神怪・威力絶大なる千手観音の崇拜が、この流れをほとんど代表するようになったという。

千手観音に関する経軌の初訳は、唐の智通訳『千臂千眼観世音菩薩陀羅尼経』二巻で、『千臂経』・『千手経』ともいう。『宋高僧伝』（『大正蔵』巻四九、頁七一九下段第一九行〜頁七二〇上段第一行）によれば、智通は、俗姓は趙、河南西部の陝州安邑の人であり、律行精明、経論該博であったが、西域に行つて法を求め志を立て、洛陽の訳経館において梵語・梵書を習得した。貞觀期に北天竺の僧が『千臂千眼経』の梵本を齎して奉進したとき、太宗の勅によつて智通は梵僧と共にこの経を訳した。また、高宗の永徽四年（六五三年）に、總持寺において、『千臂陀羅尼観世音菩薩呪』一卷・『観自在菩薩随心呪』一卷・『清淨観世音菩薩陀羅尼』一卷などの四部五巻を訳した。その翻訳は梵文をよく理解すると共に、あたかもそれに漢文をただちに対応させたので、人はみな推伏したという。また瑜伽祕密教の呪術を行い大きく感通を得たという。即ち、智通は専門的に諸観音の呪経を訳した人であり、諸観音の呪術を修行して神通をも持っている人物であつたので、呪法を主とする当時の変化観音の勃興に際し、彼が、一種の有力な推進者の役割を果たしたことも推察できる。智通が『千臂千眼経』を訳した後に、（七〇六年頃）菩提流志が同本をもう一度訳した。これは『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経』一卷である。智通の訳した『千臂千眼経』は後々まで広く読まれたが、しかし実際に陀羅尼として後にもつぱら誦持されたのは、智通もその翻訳に参加した伽梵達摩訳の『千手千眼観世音菩薩廣大圓滿無碍大悲心陀羅尼経』一卷である。ちなみに唐代に訳された千手千眼大悲の経軌は決してこれらの訳に止まらず、それらを合わせて十一本が翻訳されたとい<sup>10</sup>う。

その内容と思想は諸々の陀羅尼文と印契を説いて、色々な方便を持つことに特徴がある。特に伽梵達摩訳では、この

陀羅尼の功德として飢餓と困苦によつて死ぬことはないなどとする十五種の善生と、さまざまな誦持の功德と成就法を示し、さらに如意手から葡萄手までの四十の手（無畏手と契印も含む）に各々の功德があることを説き、最後に日光・月光菩薩が陀羅尼の受持者を擁護するための陀羅尼を説いたという<sup>(1)</sup>。このような千臂・千眼・千面（首）などの内容が特徴的に強調されている。

#### 四、二種の観音信仰の合流と『首楞嚴經』

##### (一) 『首楞嚴經』の趣旨

本經の内容は、次の通りである。阿難が乞食の途中、魔女の摩登伽の幻術にかかり、あやうく戒体を破ろうとするところに、「常住真心、性淨明体」を説く有名な「七処徵心」を述べて、主客内外に拘わらず、心を固定的に把握しようとする想念が次々と打破される。そこに一切衆生が、無始以來、顛倒を重ねるのは、二種根本を知らないで、錯乱し修習するからだとされ、その一は無始生死の根本、その二は無始の菩提涅槃の体だという。さらに、人心に深く潜む煩惱の根本が追求され、その清淨な本体を体得しなければ、たとい一切の見聞覚知を滅して、内に幽閑を守るも、猶法塵分別の影事たり」と断定される。ついに、「色身より外、山河虚空大地に至るまで、ことごとく妙明の真心中の物である」。よつて、すべての分別心を妙明元心に還す必要があるとし、八種の譬喩をあげて還の実態を示す。これは有名な八還説である。しかし真に還るところなき地還ることであつて、見るハタラクとその対象となる物類は差別があつても、見性には差異あるべきではない。ここに主客の対立を絶した見性の主体性確立が要求されるのである。その物象と見精との対立の底にあるものこそ、菩提妙淨明の体であり、この真心は是と非是との対立を超越する。さらに、「五陰・六入・十二処・十八界・七大」は因縁でもなく自然でもない、みな如来藏中のものであつて、性真円融・不生不滅である。覺に背いて塵に合するならば、塵勞を発して世間相を呈するし、塵を滅して覺に合

するならば、真如妙性を發揮する。主体の心量において瞬時に行われ、肯定されたものが一氣に否定され、否定されたものが一氣に肯定される。この意味において、次に經典で、如来蔵の心元は「即を離れ非を離れ、是即是非」といわねばならないという。「知見に知を立すれば、即ち無明の本となる。知見を見なければ、これ即ち涅槃無漏の真淨なり」と示される。そして、円通する方法として、十八界・七大がいずれも円通門であることが示される。最後に観音菩薩が、三十二の応身を示現して、衆生救済のための積極的態度を打ち出し、十四の無畏妙力と四不思議の妙功德をそなえていると語り、特に衆生の要望に耳を傾ける耳根円通を得るから、觀世音の称号を得たという。さらに、道場様式・最も長い陀羅尼及びその功德・十二類生・六十階位・十因六果・五十種の陰魔が述べられる中で、「大地草木蠕動含靈はもとより真如なり」と、強く悉有仏性が肯定される。

このような内容について、『仏祖統紀』巻十では、「嘗謂楞嚴一經、劇談常住真心、的示一乘修証、為最後垂範之典（楞嚴の一經は、劇しく常住の真心を談じ、的らかに一乗の修証を示す。最後垂範の典たり）」（『大正蔵』卷四九、頁二〇五上段第一五〜一七行）と高く評価している。『首楞嚴經』は、唐代以来、偽經視されたにも拘わらず、東アジア世界において今日まで広く愛読され信仰されている。

その中で、観音菩薩に関する内容は六巻のほとんど全巻にわたって存在するが、それは耳根円通法門・三十二応身・十四無畏・四不思議の四つの部分に分けられる。以下にこれらの四つの部分を一つ一つ分析し、唐代の観音信仰の流れをどういう風に受け継いでいるかを見てみたい。

## （二）耳根円通の観音法門と『法華經』普門品の觀智との関連

耳根円通とは、觀世音菩薩が大昔、菩提心を発して、觀世音仏から教わった聞・思・修より三摩地に入る方法である。

初於聞中、入流亡所。所入既寂、動靜二相、了然不生。如是漸增、聞・所聞尽、尽聞不住、覺・所覺空。空

覺極円、空・所空滅。生滅既滅、寂滅現前。忽然超越世出世間、十方円明、獲二殊勝。一者上合十方諸仏  
本妙覺心、与仏如来同一慈力。二者下合十方一切六道衆生、与諸衆生同一悲仰。（『大正蔵』卷一九、頁  
一二八中段第一八～二五行）

これに対して、『蓮華経』普門品の偈文は、「真観清浄観 廣大智慧観 悲観及慈観 常願常瞻仰」（『大正蔵』  
卷九、頁五八上段第一八～一九行）となっている。両者の関係は、明代の曾鳳儀が『楞嚴宗通』の中に指摘されてい  
る。『首楞嚴経』の「初於聞中、入流亡所。所入既寂、動静二相、了然不生。如是漸増、聞所聞尽」は（『法華経』  
の）真観に当たり、二つの相が生じないという意味である。「尽聞不住、覺所覺空」は（『法華経』の）「清浄観」  
に当たり、聞を尽くして覺を空となるということである。「空覺極円、空所空滅。生滅既滅、寂滅現前」は（『法華  
経』の）「廣大智慧観」に当たるといふ。

よつて、曾鳳儀によれば、『首楞嚴経』に説かれる観音菩薩の耳根円通法門は、『法華経』普門品の智観の思想を  
受け継いでいるといえる。特に、この部分に説かれている耳根円通が聞性に帰するという主張と、智顛大師によつて  
提唱された観音の真理（智観）とが極めてぴったりと合致することが窺える。

つまり、智顛大師論じたように、観音は単なる客観的な存在ではなく、宗教的真理の働きそのものということにな  
る。即ち人格としての観音菩薩を超えて、形而上学的な観音真理の存在に迫るものである。即ち観音の本体は真如法  
身であり、人格者としての観音菩薩は真如法身より働き出る化身であるとの説が生まれるといふ。<sup>(13)</sup> 観智によつて洗練  
された真理の観音は、具体的には人々が心において懺悔したり、称名したり、陀羅尼行などの実践を行うことによつ  
て、生きた人格者としての働きを顕す。その人格の認識は、機根に応じて客観的な存在ともなり、空・無我・平等と  
いった理体ともなり、卓越した真理の世界そのものともなり、真理に即した現実世界の事々物々ともなる。人々は眼  
の前に安置された観音の尊像に即して、無限絶大な真理の観音を眺めることができ、日々の生活における憂きこと悲



しきことが、一步を翻せば観音の慈悲に摂取された光明、歡喜の生活に転回するという体験をすることができる。つまり、觀照の智慧が働くことによつて、凡夫の苦惱、恐怖さらに水難・火難などが消滅して、ただ真理に照らされた諸法実相の姿があるのみであるという。<sup>(14)</sup>

### (三) 三十二の応身と普門品の三十三の化身との異同

次に、『首楞嚴経』の三十二の応身と『法華経』普門品の三十三の化身との異同について、『首楞嚴経』は「現円」や「解脱」や「成就」といった機根の段階に応じた弘徳を強調していることがわかる。また、『首楞嚴経』における「縁覚身」と「独覚身」の両者は「普門品」では辟支仏身の一つとされ、普門品の「迦楼羅身」と「執金剛身」の両者は『首楞嚴経』では欠けしている点を除いて、ほとんど一対一に対応している。よつて、『首楞嚴経』の三十二応身は『法華経』普門品の三十三の化身の内容を受け継いでいることはほぼ間違いないであろう。

### (四) 十四無畏妙力と普門品の十四点救済との比較について

次に、『首楞嚴経』における観音の十四施無畏と『法華経』普門品における観音の十四救済との異同である。まず、両者は一つ一つの内容が完全に一致した文章として対応している訳ではない。『首楞嚴経』の観音菩薩の十四無畏妙力は、普門品の中で十四の相応する内容を見出すことができる。次に、十四無畏妙力の順番と普門品の救済内容の順番とは同じである。第三に、表三太字の箇所は、同じ言葉であることが見られる。以上の三点からみれば、『首楞嚴経』の観音菩薩の十四無畏妙力は『法華経』の「普門品」の救済内容の思想を受け継いでいることが分かる。

しかし、『首楞嚴経』の観音菩薩の十四無畏妙力は普門品の内容をそのまま受容した訳ではない。相違点としては、まず、『首楞嚴経』は「普門品」の十四の内容を要約している。つまり、「普門品」の内容をそのまま受け入れ

たのではなく、核心のみを摂取しているというのである。

次に、普門品における観音菩薩の救済内容は、人々の行為の結果であるとされている。即ち、人々の現生俗世の煩惱・苦難・災害などを取り除くことと共に、利益・徳福・平和などを与えることになっている。しかし、『首楞嚴經』における観音菩薩の十四無畏妙力は、それだけではなく、人々は観音菩薩のように、自分の行為の原因、つまり因地・本性・主客の対立を絶した慧観・般若・如来蔵に戻り、我なく、諸相なく、声から離れて本心のハタラキそのものを耳に聞くこととなろうと、今まで、十四ヶ所で強く訴えているのである。我々の衆生は、心の外側に向って諸々の縁に乗って、色々な因（習気・業・我見・情見・無明など）を造り出していたので、必然的にその結果（煩惱・苦難・災害など）が次々と生み出されてきていた。若し我々衆生が、心の内面に向って諸々の縁（色・声・味・香・触・法など）を離れ、本心のハタラキそのもの（聞性）を耳に聞くことに専念すれば、すべての分別心は妙明元心に還り、聞くハタラキとその対象となる声には区別があつても、聞性には差異はないはずである。つまり、主客の対立を絶した聞性そのものへ向かつて復帰しつつ、是と非是との対立を超越する菩提妙浄明の体（真円通）を体得することができるのである。このような内容は、『首楞嚴經』における十四無畏妙力が『法華経』の普門品においては明確には述べていない、より高くすぐれた精神性を強調するものであつたといふことができる。そうすれば、因がなくなつて、その果（煩惱・苦難・災害など）も自然に生み出されてこないのである。

第三に、何によつて救済されることができるといふと、表二の太線の下線の処に示されたように、普門品の救済は、衆生が一心に「礼拝」・「供養」・「称名」などの方法を行えば、救済が得られる。これに対し、『首楞嚴經』の十四無畏妙力では、「以観観者」・「観聴旋復」・「根境円融」などの方法が採用されているのである。つまり、上述したように、見る（聞く或は知る）ハタラキの根本に向い、見性（聞性・空性）に専念すれば、是非の対立を絶した菩提妙浄明の体を悟ることができるといふ。

以上の分析からみれば、『首楞嚴經』の十四無畏妙力は、『法華經』普門品の内容の要点をおさえつつ、『法華經』の「開仏知見」・「悟仏知見」・「智觀」の精神をさらに發展させて、世間的な行為の結果（煩惱・苦難・災害などを除くことと利益・福德・事業成功など）を追求する衆生を常住真心の因地へ導き、觀音菩薩を信仰する苦難の衆生を、主客の対立を絶して、諸我なく、諸相なく、諸声から離れる聞性に回歸させるのである。つまり、世俗利益の信仰から出世修行の信仰へ引導していくこととなる。よって、『首楞嚴經』の十四無畏妙力は、因地の根から救済することが窺える。

#### (五) 四不思議と千臂大悲觀音の信仰との關係

以上みてきたに、『首楞嚴經』における觀音菩薩は仏と同じ慈力を持ち、三十二の応身がある。また、衆生の悲仰と同一となるが故に、十四無畏無作の妙力を施している。さらに、「現形說法」・「無畏衆生」・「捨宝求哀」・「所求随欲」の四不思議無作の妙徳をそなえている次に、この「四不思議」と前のこで述べた『千臂千眼大悲經』類とを比較した結果、以下の相違が判明した。

まず、『首楞嚴經』と『千臂千眼大悲經』類では、完全に一致する言葉あるいは文句はほとんどないが、以下のようないふことがいえる。『首楞嚴經』では、第一に、初に根と塵を忘れれば妙となり、次に智と境を絶して、能と所と俱に寂すれば、妙妙となるという。すると、六根は、有為相から脱却して見・聞・覺・知の分隔が無くなり、一と六との対立も消えて、六根相互に用となる。そして、一つの円融清浄の宝覺となり、即ち寂滅現前、應化無方となる。そして、首・臂・目の数は皆千種となり、さらに八万四千まで数えられるのである。宋代の長水子睿の解釈によれば、「首出衆聖」は法身であり、「臂能提接」は化身であり、「目以導明」は智身（自受用の報身）である。これは、おそらく衆生の八万四千の煩惱に対応するのであろう。それと表三の右に示した対応する内容からみれば、『首楞嚴

『經』の成立の当時には、大悲觀音信仰を典拠とする『千臂千眼大悲陀羅尼經』類を色々な方面から包摂しようとする意図が窺える。第二に、体性から不思議の用が現われ千首・千臂・千目の形と陀羅尼を誦する力とによって、衆生に無畏を施すことから施無畏者と名付けているという。ということからみれば、三種類の布施の中に最高の無畏布施として、密教における大悲信仰である大悲陀羅尼の巨大な威力を内摂しようとする意図が見て取れる。さらに、『首楞嚴經』によれば、第三に、衆生の功德を積むため布施波羅蜜を衆生にさせようと、財布施と身布施を喜んで行わせるという。また、第四に、衆生が妻や子供を求めるところから大涅槃までも求めるならば、それらを、皆満足させるという。ここには、大悲陀羅尼の多数な方便を内包しようという考えがあったと思われる。

その目的は、やはり大悲觀音の信仰をもちつつも、現世の利益・福德・事業成功などを追求する諸衆生を、少しずつ觀音信仰の根本、つまり、仏教の深い根本である如来藏を悟る出世修行の方向に導いていくことである。

最後に、文殊菩薩は、耳根円通の觀音法門をわれわれの娑婆世界の根機に最も適切することを絶賛している長い偈文があつて、「反聞聞自性、性成無上道」の教えがあつたからこそ、本經は最後垂範の典と位置を付けたのである。

### おわりに

中国における觀音信仰には、底流とする正統的で簡素な普門觀音信仰の流れがあつた。それと唐代に盛んになつた陀羅尼密教の複雑怪奇な觀音信仰が千手大悲觀音へと吸収された。先学達の優れた研究を参照しながら、このような二つ流れの典拠となつた經典と『首楞嚴經』第六卷にある觀音の耳根円通法門・三十二応身・十四無畏・四不思議とを検討してきた。その結果、二つの流れをまとめようとする意図が『首楞嚴經』第六卷の中に見られることが明らかとなつた。つまり、二つの觀音信仰の流れとその典拠となつた經典の思想を含みながら、俗世の利益だけを追求する衆生を強く導いて「反聞聞自性、性成無上道」の諸法実相の見性へ、俗世と出世を越えて十方円明に向かわせようと

した。このような教えと精神があつたからこそ、本経は今まで、中国の観音信仰の三大經典の一つとして、『楞嚴呪』や『大悲呪』と共に、朝晩の課に必ず誦持されたものとして伝えられてきた。このような事実からも、中国の観音信仰における『首楞嚴経』の影響力は大きいといえるであろう。

しかし、今回、最後の結論までにはまだ至っていない。特に大悲観音との関係は検討不足といえる。さらに細かく精査する必要があり、今後の課題として研究を続けたい。

【注】

- (1) 佐和隆研「観世音菩薩の展開」、『仏教芸術』第一〇号、一九五〇年、頁四六～四七。
- (2) 松本文三郎「観音の語義と古代印度、支那におけるその信仰について」、速水侑編『観音信仰研究』（『民衆宗教史叢書』巻七）、雄山閣出版社、一九八二年二月、頁一～一六。
- (3) 韓秉方「観世音信仰与妙善的伝説—兼及我国最早一部宝卷《香山宝卷》の産生」、『世界宗教研究』二〇〇四年第二期。
- (4) 劉輝「観音信仰民族探源」、巴蜀書社、二〇〇六年。
- (5) 佐藤泰舜「六朝時代の観音信仰」速水侑編『観音信仰研究』（『民衆宗教史叢書』巻七）雄山閣出版社、一九八二年、頁二七～三五）、小林太市郎「唐晋の観音」、『仏教芸術』第一〇号、一九五〇年、頁三～七三。
- (6) 同上。
- (7) その流れの中でも、その後代に、妙善公主、水月観音、白衣観音、放光観音、馬郎婦、魚藍観音、誌公、僧伽、万廻ないし十生観音など様々な方面の信仰があり、女性化して展開された流れが盛んになったのが、趙宋以降となるという（小林太市郎『唐代の大悲観音』参照）。
- (8) 佐和隆研「観世音菩薩の展開」。
- (9) 小林太市郎『唐代の大悲観音』等を参照。
- (10) 小林太市郎『唐代の大悲観音』（頁四三）参照。
- (11) 鎌田茂雄ほか（編）『大蔵経全解説大事典』、雄山閣出版社、二〇〇〇年、頁三〇七。
- (12) 荒木見悟「楞嚴経・解説」、『中国撰述教典二』筑摩書房、一九七六年、頁三六一～三八〇。
- (13) 佐藤泰舜「六朝時代の観音信仰」を参照。
- (14) 同上、頁三四を参照。